科学者委員会学術誌問題検討分科会（第１回）議事録

日　時：　平成２１年２月２７日（金）１３：００～１５：００
場　所：　日本学術会議　５－Ｃ（１）会議室
出席者：　浅島委員，大垣委員，鈴村委員，田口委員，北島委員，
　　山本（正）委員，玉尾委員，植田委員，西郷委員
事務局：　渡邉参事官　他

配布資料：
　資料１　委員名簿
　資料２　学術誌問題検討分科会設置提案書
　資料３　科学者委員会運営要綱
　資料４　学術誌問題の論点について

　参考１　第 152 回総会議事要旨（抜粋）(2008 年 4 月 8 日)
　参考２　第 74 回総合科学技術会議議事要旨(抜粋)(2008 年 4 月 10 日)
　参考３（報告）ジャーナル問題について（金澤会長 CSTP 説明資料）
　参考４　ジャーナル問題に関する勉強会の開催等について
　参考５　ジャーナル問題に関する勉強会（第８回）で検討された
　　課題について（案）
　参考６　対外報告「学協会の機能強化のために」(2007 年 6 月 28 日)
　参考７　国際的な発信力強化に向けての提言（平成 17 年４月）
　参考８　日本学術会議会長コメント（平成 17 年 9 月）
　　参考 8-1 要望「電子媒体学術情報の恒久的な蓄積・保存・利用体制の整備・確立」
　　(平成 17 年 9 月)
　　参考 8-2 要望「我が国英文学術誌による学術情報発信の推進について」(平成 17
　　年 9 月)
　　参考 8-3 報告「物理系学術誌の将来に向けて－工学系分野の立場
　　から－」(平成 17 年 9 月：応用物理学研究連絡委員会　他)
　参考９　報告「電子的学術定期出版物の収集体制の確立に関する緊急の提言」(平成
　　12 年 6 月：情報学研究連絡委員会・学術文献情報専門委員会)

議事

１．出席者自己紹介

浅島委員（世話人）の司会の下，出席者の自己紹介が行われた。

２．委員長，副委員長，幹事の選出

浅島委員（世話人）の司会の下，委員長選出がなされ，委員の互選により浅島委員が選出された。また，続いて，浅島委員長より，副委員長に山本（眞）委員，幹事に玉尾委員及び西郷委員が指名され，承認された。

浅島委員長より，議事録について，幹事が作成するように指示があった。

３．設置趣旨等について

科学者委員会・大垣委員長から，資料２～３に基づき，本分科会設置の経緯

と趣旨についての説明があった。

４．学術誌問題の論点について

科学者委員会・大垣委員長から，資料４（大垣メモ）に基づき，学術誌問題の論点について説明があった。

（１）学術の立場からの国際学術情報へのアクセスの平均化（均等化）
（２）国内発行の英文雑誌発刊の必要性とその発刊体制
（３）その他の論点として出ている課題
　　１）オープンアクセス化に関する基本方針の作成
　　２）インパクトファクターと評価あるいはそれに対抗する指標

さらに，（１）及び（２）について，重点的に審議しては如何かとの提案があった。

浅島委員長から，以下の意見が出された。１）寡占化の問題への対応，オープンアクセスの問題も重要である。２）各国のジャーナル問題を池田先生らが調査している。３）中国などが国家戦略として取り組み始めているのに，日本は全く取り組みがなされていない。

次いで，浅島委員長より，全委員に対する意見聴取が行われた。

西郷委員:文系では電子化は遅れているので冊子体にも注意を払う必要がある。
植田委員：物理の分野では，投稿料無料になってきた。アーカイブの利用も拡大している。
玉尾委員：インパクトファクター問題について，国家戦略が重要である。世界に通用する雑誌のモデルを作り上げることが必要である。
山本(正)委員：日本発のジャーナルをつくったが，そのインパクトファクターは５まで上がった。この例から分かるように，もっとちゃんと発刊する必要がある。
北島委員:日本発のジャーナル発刊には,それなりの努力と覚悟が必要である。New England Journal 1F56 では，ハーバード大教授だがジャーナル専任でエディターを務めているし，優れたスタッフを沢山擁し，IT 環境を高度に利用するなどしている。米欧の学生を集めて要望を聞くことも有意義である。時間がほしい。将来ペーパーはなくなり，Web になるだろう。今や i-POD で読めるようになっている。
田口委員：文系ではジャーナルの位置づけが違うので，タイムラグは問題にならない。文系の状況も勘案した提言でなければならない。
鈴村委員：経済の分野では，ある学術誌を 60 年前に発刊し，国際誌化を目指した。Blackwell から発行している。トップジャーナルの投稿料はゼロである。日本のジャーナルの国際競争力は依然低い。若い人に，良い成果を日本のジャーナルに載せるように要請できない。
大垣委員：日本初の雑誌を考えるとき，グローバル企業／雑誌に対抗する意義を明確にし，それなりの覚悟が必要である。
浅島委員長：韓国では，国がビルを借り切り，学会を集めている。日本、全くそのような取り組みはない。先生の手弁当でやっている。国力が弱っている。

何とかしないといけない。若手編集者の育成が急務である。

５．今後の進め方について

前記議論を踏まえ，浅島委員長より，大垣メモ（資料４）の（１）項及び（２）項を今後の検討課題に選び（３）項については適宜（１），（２）で検討することとし，それぞれにＷＧを設けたいとの提案があり，了承された。また，浅島委員長より，２つのＷＧの構成について以下の提案があり，了承された。

（１）学術情報へのアクセスの平等化：

幹事：西郷委員，大垣委員，鈴村委員，山本(眞)委員，浅島委員長

（２）国内発行の英文誌発行の必要性，発刊体制：

幹事：玉尾委員，植田委員，山本(正)委員，北島委員，田口委員

また，検討事項に関して，以下の意見・情報が出された。

- 英文雑誌の具体案つくる必要がある。
- 化学では英文２誌，物理では和文なし，応用物理では和文なしで英文３誌，機械で日英両方出している。
- インパクトファクターを上げる方策として，Ｊ－ＳＴＡＧＥなどが、海外出版社に対抗する具体策を作成する，日本の次世代編集者を育成する，文科省のジャーナル出版支援予算カットに対する対策を立てる必要があるのではないか。
- 国家戦略としてモデル的編集体制を構築し，編集委員長，編集委員，編集者の育成を行い，編集者のキャリアパスも考えて雇用予算を文科省に要求してはどうか。
- 分野別の学会連合などを基にジャーナルをまとめ，サポートしてはどうか。
- 文系和文ジャーナルの国際化（英文化ではない)、も議論してほしい。
- 研究の国際化も視野に入れる必要がある。
- 日本に良い論文誌ができると、臨床研究が伸びてくる。
- 物理学会と応用物理学会は，合同で出版を始めた（ＩＦ２．２)。専任編集委員を２名雇用し，ノーベル賞受賞者４名が投稿したものもある。
- 電子ジャーナルのジャパンパッケージが必要であろう。
- バーチャルジャーナルを作れる subject depository を構築することも重要である。
- 手弁当体制を変えないといけない。
- 政府は，まとまれば支援を考えると言っている。今は，学会がまとまらないから対応できない。
- パッケージ化の例として，アメリカ SPARK がある。また，イギリスでは新しいジャーナルの出し方を考えてシステムを作った。

次いで，浅島委員長から、参考資料（１－９）について説明があった。

海外の状況を調査するための参考人を呼ぶことができるので，以下の方々を協力者としてリストすることとした。具体的な調査依頼は，物理は植田委員、化学と生物は玉尾幹事が行うこととした。

化学：林さん（交渉担当：玉尾委員）

物理：谷藤幹子さん（交渉担当：植田委員）
生物：永井裕子さん（交渉担当：浅島委員）

各学協会が海外商業出版社に出版依頼していることが高騰化にもつながっているとの認識の下にこれを止めて新体制に入りうるか，科研費による研究成果の国内発行論文誌への発表義務化が可能か，についても参考人を依頼して調査することとした。具体的な調査依頼は，西郷幹事が行うこととした。

６．その他

ＷＧ会議には旅費がでないので，分科会を開催する形で両ＷＧ会議を開催することとした。

次回は，4 月 27 日（月）13-15 時とすることとした。